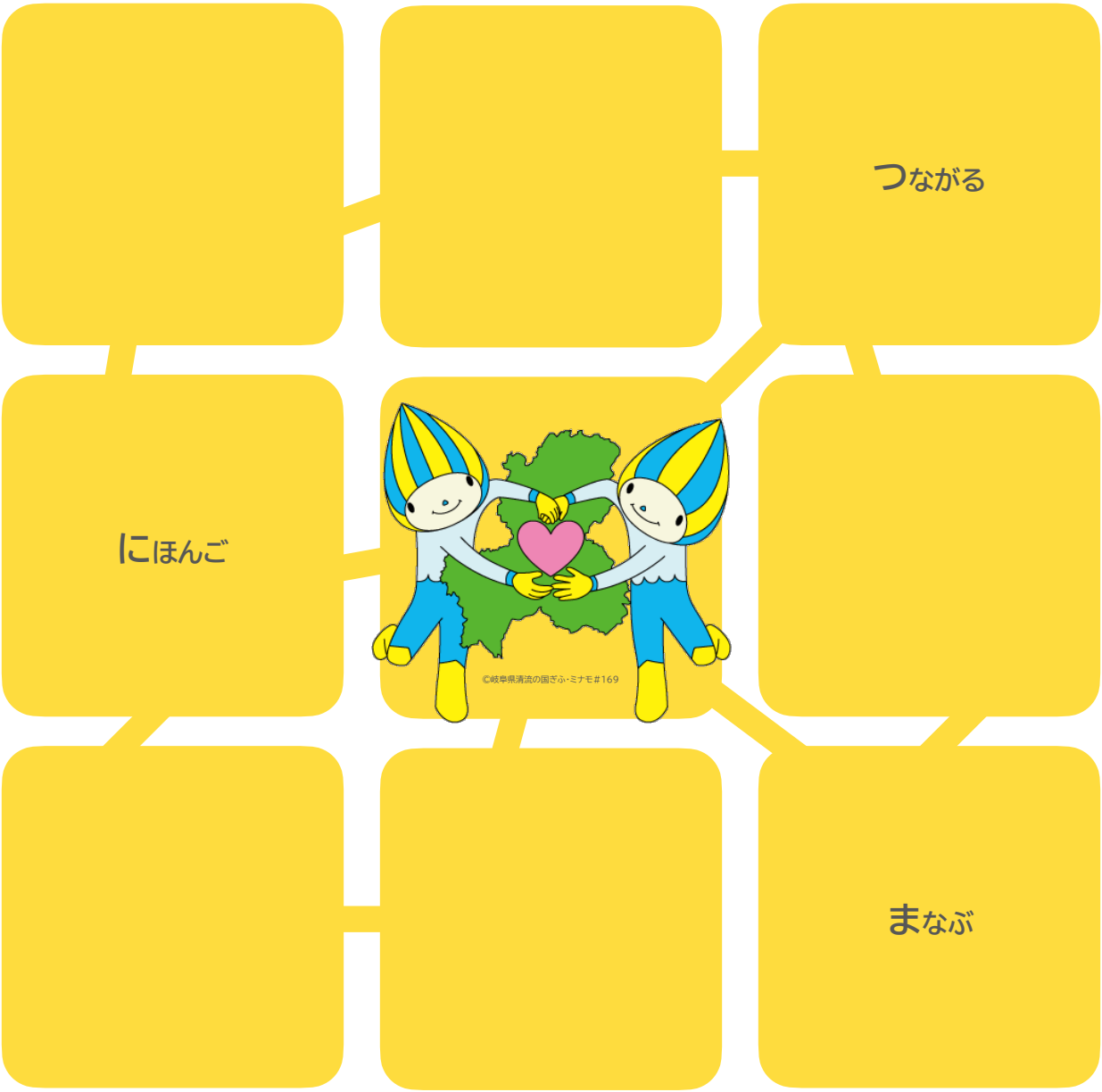


岐阜県　地域日本語教育のための教材

ぎふ　せいかつのにほんご

進め方のアイディア

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

GIFU

文化庁
Agency for Cultural Affairs, Government of Japan

※この資料は愛知県の「『はじめての日本語教室』指導者向け教材活用マニュアル」をもとに再構成・加筆し、作成しています。

https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/kyozai-hajimete-nihongo.html

ご挨拶

岐阜県では、『岐阜県外国人材活躍・多文化共生推進基本方針』（現在4期目、令和4年度から令和8年度）を策定しました。この方針では、岐阜県に暮らす多様な背景を持つ全ての人々が、お互いの異なる文化や考え方を尊重しながら、円滑にコミュニケーションを図ることにより、「全ての県民が働きやすく、暮らしやすい地域社会（多文化共生社会）」の実現を目指しています。

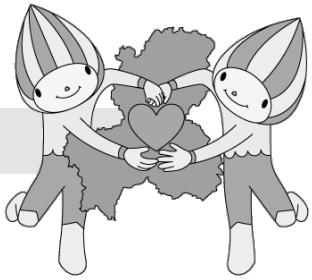
これまでの入管法の改正や、世界情勢の影響等によって、全国的に在住外国人が増加しています。そこで国は、令和元年6月、「日本語教育の推進に関する法律」を公布・施行し、日本語教育の推進に関する基本理念や地方公共団体の責務等を明確にしました。

岐阜県においては、文化庁の補助を受けて令和元年度より「岐阜県日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」を実施し、県内各地域における日本語教育の体制整備を開始しました。事業開始当初（令和元年4月）、県内42市町村のうち、地域日本語教室が開設されていたのは20市町（37教室）のみでした。そこで、令和3、4年度に、市町村が地域日本語教室に主体的にかかわる「市町村と連携したモデル日本語教室」を実施しました。また、外国人県民と日本人県民が相互理解を深めることによって、誰ひとり地域社会で孤立することなく安心・安全に生活できるようになることを目指して、この教材の作成を行いました。

私たちは、地域に住む外国人県民と日本人県民が交流し、「対話」や「行動・体験」をともにすることにより、多文化共生社会の実現に供することを心より願っています。

令和５年３月　岐阜県　清流の国推進部
外国人活躍・共生社会推進課

目次



©岐阜県清流の国ぎふ・ミナモ#169

01 この教材を使う方へ …… 01

02 参加者の役割 …… 07

03 教材の構成 …… 13

04 各テーマのねらい …… 15

05 活動の進め方の例

対話型のテーマ …… 29

行動・体験型のテーマ …… 35

コラム一覧

学ぶのは誰か？ …… 04

「やさしい日本語」の活用 …… 10

役立つ資料の探し方 …… 26

参加者の組み合わせの工夫 …… 33

学習者の日本語能力のものさし …… 34

外部との連携① …… 40

外部との連携② …… 44

学習者が少ないとき① …… 48

学習者が少ないとき② …… 52

大切なのは「やり方」ではなく「なぜやるか」 …… 61

1

この教材を使う方へ

1

この教材を使う方へ

岐阜県には多くの外国人が暮らしており、岐阜県は平成19年に『岐阜県多文化共生推進基本方針』を策定して以来、外国人県民と日本人県民が「お互いの文化や考え方を尊重するとともに、安心して快適に暮らすことのできる地域社会（多文化共生社会）」の実現を目指してきました。多文化共生社会の実現には様々な取り組みが必要ですが、そのひとつして、誰もが日本語学習の機会を得られるようになることを目指し、岐阜県日本語教育の総合的な体制づくり推進事業［※1］を令和元年度から行っています。この教材もその一環で作られました。

この教材が目指すもの

地域日本語教室には様々な形があり、参加者の役割や活動内容も様々です。この教材は、地域日本語教室が同じ地域で暮らす外国人住民と日本人住民の接点になるという側面に注目し、日本語教室が多文化共生の実現につながる以下のような場になることを目指して作られました。

1．学習者が自分に必要な日本語と地域での暮らしに役立つ情報を学べる場

2．支援者が外国人にも伝わりやすい話し方や、いろいろな「あたりまえ」を学べる場

3．みんながお互いのことをよく知り、関係を深められる場

日本語教室というと、外国人が学習者として日本語を学ぶ場と捉えられがちですが、実は支援者も学習者との関わりを通して多くのものを得ています。参加者はお互いに学び合う関係にあるのです。また、教室は普段の生活で日本人と接点がなかった外国人住民、外国人と接点がなかった日本人住民が交流する貴重な機会になります。ここで一緒に活動することで、お互いのことを知り、外国人／日本人に対する心のハードルが下がり、同じ地域に住んでいる人としての一体感が生まれます。こうして生まれた人間関係や気づきが、多文化共生社会の実現に必要な受け入れ社会側の変容につながると考えています。

※1 https://www.pref.gifu.lg.jp/page/26439.html

この教材の特徴

1. 参加者同士が対話する活動を中心に構成しました

この教材は自習のためのものではなく、誰かと一緒に話しながら活動を進めていくことを前提にしています。なぜなら、日本語を身につけるためには、暗記したことをただ繰り返すのではなく、「本物のコミュニケーション」を何度も経験することが大切だからです。「本物のコミュニケーション」とは、相手が知らない、本当の情報を伝えたり、聞いたりするために行われるコミュニケーションのことです。相手が既に知っていることや架空のことを練習のためにやりとりすることは「本物のコミュニケーション」ではなく、「ことばの練習」にすぎません。「対話型日本語教室」では、この本物のコミュニケーション活動を行います。

教室でのやりとりが「本物のコミュニケーション」となるように、教材はお互いに自分自身に関する本当の情報を伝え合う活動や、一緒に体験する活動で構成されています。対話を通して、お互いのことをよく知り、同時に自分に必要な日本語を習得していくことを目指しています。

2. 生活情報・生活知識を、体験や活動を通して学べるようにしました

私たちはその地域で暮らすうえで必要なことを、様々な場面で経験しながら身につけていきます。日本人であっても、全く違う地方へ引っ越すと、方言の違いや様々な制度・習慣の違いに戸惑います。外国で育った人にとっては、そこにさらに言葉の壁があり、情報を手に入れたり、理解たりすることが難しい状況があります。また、言葉が十分に理解できたとしても適切な行動が取れない場合もあります。例えば、緊急地震速報が鳴って「もうすぐ地震が来ます」という言葉が理解できたとしても、どんな場所でどんな姿勢を取ることが安全なのかを知らなければ、とっさに身を守ることができません。これは経験の違いによるものです。私たちは、子どもの頃から、学校や暮らしの中で様々なことを身につけているのです。

そこで、特に命や安全に関わることをテーマとして取り上げ、学習者と支援者が一緒にそれらを体験できる活動を取り入れました。一緒に活動する中で、学習者は自分にとって必要な情報を知り、支援者は国によって制度や環境に違いがあることを知ることを期待しています。

3．入門レベルの人でも、ある程度日本語ができる人でも、学びが得られる形を目指しました

日本語教材は基本的に日本語で書かれているものが多いです。しかし、地域で暮らす外国人の中には日本語を学習する機会がなく、全く日本語が理解できない人や、日々の生活の中で日本語のやりとりができるようになったけれど文字は習得できていないという人もいます。そこで、この教材では、指示文や自己評価のための文に全て翻訳をつけました（2023年3月現在、日本語、ポルトガル語、タガログ語、英語、中国語、ベトナム語の5か国語）。 そのため、日本語がまだ分からない人、日本語の文字が読めない人でも、母語または自分が理解できる言語を見て活動に参加できます。

また、地域の教室には様々な日本語レベルの人が参加することが予想されます。学習者によって、必要な表現、知りたい言葉、伝えたい言葉は違うという考えから、教材の中には明示的な文法説明や語彙学習は組み込んでありません。一緒に活動する人とのやりとりが学びの種になるのです。そのため、どんな日本語レベルの人でもこの教材を使うことができます。ワークシートには、やりとりの中で理解したことや、覚えておきたいことがだんだん蓄積され、それぞれオリジナルの教科書のような存在になります。

4．学びや発見が埋もれてしまわないように、自分の学びを記録する「ふりかえりシート」を作成しました

「ふりかえりシート」には、「チェックしましょう」というCan-do statements（能力記述文）が書かれた項目と、自分の学習を記録する項目が含まれています。Can-do statements（能力記述文）とは、日常生活の中で日本語を使う可能性のある行動を一つずつ文にして、リストにしたものです。

例）自分の体調について日本語で伝えることができる。
　　いつ、どんな病気になったか、どんなけがをしたか、日本語で説明できる。

毎回のクラス活動の最初と最後に、「チェックしましょう」を母語や使用言語で読み、自分ができるかどうか自己評価する時間をとっています。それによって、日常生活の中で、自分はその場面で日本語を使っているか、日本語でどれぐらいできるかをふりかえることができます。

また、「チェックしましょう」の内容はその日の教室活動と連動しているため、その日の活動で自分の生活の中のどの部分で役立つことを学べるのか、意識して学習にのぞむことができます。

「対話型日本語教室」は、一見すると教室活動がただのおしゃべりのように感じられることがありますが、このように Can-do statements を活用して学習目標を明確に意識することで、学習活動としての効果を担保しています。さらに、自分の学びを記録する項目を設けることで、毎回の学びを可視化しています。この活動を続けると、日常生活の中でも「後で、どのように言えばよかったのか調べよう」「次に日本語教室に参加したときに質問してみよう」と考える習慣が身につきます。学習者が普段の生活の中でも主体的に学ぶ姿勢を育てることで、より早く効率的に日本語の能力が向上するように願って、教室活動や教材を設計しています。

コラム「学ぶのは誰か？」

日本語教室という名前であっても、日本語を教える側にも学ぶことがたくさんあると思っています。言い換えれば、日本人側にも学ぶことがあってこその地域日本語教室であって、それこそが活動の醍醐味ではないでしょうか。実際に岐阜県で実施されたモデル日本語教室の参加者の方からは「自分が思ってもいないところで不便に感じていることがあることがわかった。教えるのではなく寄り添うことをもっと意識して外国人の方と接したい」というコメントや、「参加を重ねながら、自ら話してくれるような関係を作りたいと思うようになりました」といった意見もありました。

まずは、話しやすい、相談しやすいような関係性を築きながら、学習者の発言や行動から国際社会を肌で知る。そして、そこで得たものを日本社会に還元していく。そうして日本の地域社会はだんだん豊かになっていくんだと思います。

みなさんで、お互いに「教え合い」、そうして「学び合い」、地域社会をさらに実りあるものに発展させていきませんか。

2

参加者の役割

2

参加者の役割

この教材の活動は、「日本語指導者」による進行のもと、「日本語学習者」と「日本語パートナー」が複数のグループに分かれて活動することを想定して作られています。それぞれの役割を説明します。

※この教材はマンツーマンや、少人数のグループ活動で使うこともできますが、役割分担をして複数のグループで一緒に活動すると、効果を最大限発揮することができます。

日本語指導者

日本語指導者（以下、指導者）は日本語教室の毎回の活動の設計、実施、参加者の育成を行います。指導者は地域の日本語教育に関する知識をもち、日本語学習者（以下、学習者）が日本語教室で「参加しただけ」で終わらないよう、学ぶ機会を作ります。学習者の学ぶ機会を確保するために必要な指導者の役割は、大きく分けて２つあります。

１つ目は学ぶきっかけと仕組みを作ることです。例えば、学習者が身の回りの日本語を獲得するために適したテーマでカリキュラムや教材を作成したり、学習者がその日の活動の学習成果を実感できるような学習のふりかえり活動を教室活動に組み込んだりします。また、学習者や日本語パートナー（以下、パートナー）から日本語の文法や学習方法に関する質問が出た場合に、助言します。そのため、日本語教育に関する幅広い知識をもっていること、参照できるリソースを知っていることが求められます。

２つ目は教室活動中の調整です。進行を管理するのはもちろん、参加者同士の交流の様子を見て、やりとりが滞ってしまったり、一人だけが話し続けていたり、極端に脱線した話ばかりになってしまっていたりする場合に、参加者の組み合わせを変えることもします。

また、パートナーが、教室参加を重ねて、学習支援者としてよりよい活動ができるよう、パートナーと一緒に教室活動の様子をふりかえったり、活動に関する相談にのったりします。

日本語パートナー

日本語パートナーは指導者の進行のもと、学習者と一緒に活動に参加して、学習を支援します。ただし、指導者とは異なり、日本語教育の基礎知識を持っていることを前提としていません。教室の中で学習者と対話しながら、自分自身の日本語をふりかえり、相手がわかりやすいことばに言い換える技術や、相手が自分の話を理解しているか意識する姿勢が求められます。しかし、これははじめから誰でもできるものではありません。教室への参加や日々の活動をふりかえることで、徐々に獲得していく必要があります。日本語パートナーは教室のカリキュラムを考えたり、毎回の活動を進行したりする必要はありません。教室活動の目的や教材の使い方を理解し、学習者と「本物のコミュニケーション」をすることが非常に重要です。

日本語学習者

学習者は教室活動を通して日本語を学習します。この対話型の教室では「本物のコミュニケーション」を通して自分に必要な日本語を選び取ることが必要になりますから、教室に参加するとき、「何か役立つ日本語を教えてもらえる」という姿勢ではいけません。

自分は日本語で何ができるのか、次に何を学びたいのかを意識して教室に参加し、日本語パートナーとの対話を通して、自分にとって重要だと思った日本語や、関心をもった日本語を学びとる姿勢で参加する必要があります。

この教材を使った活動の中には日本語を学ぶきっかけはたくさん用意されていますが、その日に覚えなければならない、全員に共通した学習項目は決まっていません。参加した学習者が、対話相手が話したことや自身が言いたいと思ったことなどから、自分で学びたいことを獲得します。

このように自分の日本語の学習に責任をもつ姿勢で学習にのぞむことが大切です。

その他

ここまで述べてきた三者の他、2つの立場の人が参加します。「指導補助者」は日本語指導者の意図が行きわたるよう教室活動の補助をします。「コーディネーター」は教室全体の設計や主催者（市町村など）との調整を担います。

コラム「『やさしい日本語』の活用」

日本語教室には外国人と接するのが初めてという人も参加します。普段の日本語の話し方で学習者と接してしまうと、やりとりがうまくいかず、お互いに困ってしまう場面が多く起こります。

日本語を学び始めた人たちとうまくコミュニケーションをするひとつのヒントとして「やさしい日本語」について紹介すると役立つでしょう。

「やさしい日本語」については全国的に取り組みが広がっており、様々な自治体や団体が広報・啓発資料を公開しています。

教室参加者にどんなことができるようになってもらいたいか、どんなことに気づいてほしいかを考えて資料を探してみてください。

例)「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン　話し言葉のポイント」(話し言葉のやさしい日本語の活用促進に関する会議)
https://www.moj.go.jp/isa/policies/policies/12 00053.htm

3

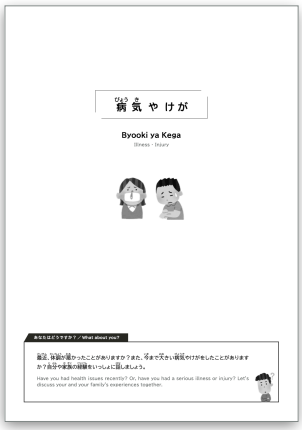
教材の構成

3

教材の構成

岐阜県の教材は、主にワークシートとふりかえりシートの2つで構成されています。それ以外に、表紙と練習シート(教材とは別データ)があります。教材の中には外国語と日本語の指示文がありますが、日本語はパートナーのためのものです。以下は、対話型のテーマ「病気やけが」を例とした説明です。テーマによって、多少構成が異なります。

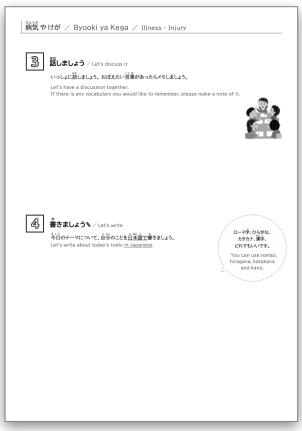
[表紙]



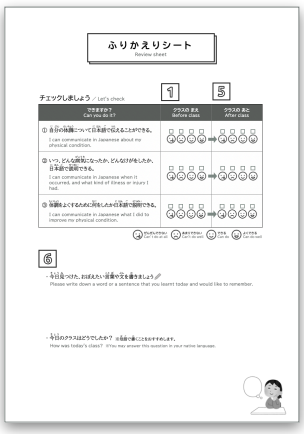
テーマ、イラスト、及び「あなたはどうですか？」を確認し、その日のテーマのイメージを想起させます。

[ワークシート]

②は、「話しましょう」で伝えたいことをメモする欄です。日本語の文で書く必要はなく、今自分ができる方法全てを使って(イラスト、写真、辞書など)できるところまで準備します。



③は、対話の中で出てきたことばや知ったことを自由にメモする欄です。
④は、対話活動で伝えたことをもう一度日本語の文で書く欄です。



[ふりかえりシート]

「チェックしましょう」はCan-do statements(能力記述文)を読んで自己評価をする欄です。クラスの冒頭と、クラスの最後に実施します。

⑥(一部のテーマでは⑦)は、ワークシートにメモしたものから、覚えたいと思う言葉や文を書く欄と、その日のクラス活動の最後に感想を書く欄です。

4

各テーマのねらい

4

各テーマのねらい

この教材には「対話型」のテーマ（1～4）と「行動・体験型」のテーマ（A～F）の２つが含まれています。

［ 対話型のテーマ ］

1	自己紹介
2	買いもの
3	病気やけが
4	ふるさと

日本語学習と相互理解のためのテーマです。テーマについて、自分のことを話したり、相手のことを聞いたりして、お互いのことを知りながら身近な日本語を学ぶことが目的です。

［ 行動・体験型のテーマ ］

A	ごみの出し方
B	防災1
C	防災2
D	地震
E	119番
F	110番

その地域で暮らしていくうえで重要な情報や知識を身につけるためのテーマです。一緒に調べたり、体験したりする活動を通して、必要な場面で適切な行動が取れるようになることが目的です。

どのテーマも1回完結で、1回90分～2時間の活動時間を想定しています。そのため、自由に組み合わせてコースを編成することができます。また、全てのテーマを扱う必要はありません。地域の特性や、教室参加者の興味関心に合わせて取捨選択して使ってください。

自己紹介

Can-do statements

① はじめて会った人と日本語で簡単な挨拶をすることができる。

② はじめて会った人と日本語で名前、出身地、仕事、好きなことなどを質問したり、答えたりすることができる。

活動のねらい

日本語学習者

- 他の参加者と知り合い、新しい人間関係を構築する。
- 初めて会った人と話すときによく聞かれる事項について、日本語でやりとりできるようになる。

日本語パートナー

- 他の参加者と知り合い、新しい人間関係を構築する。
- 同じ地域にどんな外国人が住んでいるか知る。
- 外国人にも伝わりやすいやりとりの仕方に気づく。

準備するもの

- ワークシート、ふりかえりシート
- 練習シート（活動で使う場合）
- あれば、辞書
- あれば、Wi-Fi
- ひらがな・カタカナシート（使いたい人が使えるように）
  https://tsunagarujp.bunka.go.jp/nihongo#form1

役立つ資料

- 地図（世界地図、日本地図、岐阜県の地図、町の地図など）
- 自分の好きなことや仕事などに関する写真・ビデオ（参加者自身に用意してもらう）

買いもの

Can-do statements

① いつもどこで買いものをするか、日本語で話すことができる。

② どうして①の店に行くか、日本語で話すことができる。

③ どこで自分のほしいものが買えるか、日本語で聞くことができる。

活動のねらい

日本語学習者

- 買いものに関すること（店の名前、品物の名前、値段、高い、安い、割引など）の日本語の語彙や表現を知る。
- 住んでいる地域のお得な情報や、知らなかった店の情報を知る。

日本語パートナー

- 参加者が同じ店や、知っている店を利用していることを知り、同じ地域の住民であることを実感する。
- 住んでいる地域のお得な情報や、知らなかった店の情報を知る。

準備するもの

- ワークシート、ふりかえりシート
- 練習シート（活動で使う場合）
- あれば、辞書
- あれば、Wi-Fi
- ひらがな・カタカナシート（使いたい人が使えるように）
  https://tsunagarujp.bunka.go.jp/nihongo#form1

役立つ資料

- 町の地図（店の位置がいっしょに確認できるようなもの）
- 近所のスーパーやホームセンター、ドラッグストアなどの、よく行く店のチラシ

病気やけが

Can-do statements

① 自分の体調について日本語で伝えることができる。

② いつ、どんな病気になったか、どんなけがをしたか、日本語で説明できる。

③ 体調をよくするために何をしたか、日本語で説明できる。

活動のねらい

日本語学習者

- やりとりを通して、過去・現在の病気やけが（風邪など軽いものも含む）について話すことで様々な表現に触れ、職場や病院などでも体調不良を説明できるようになる。
- 病気やけがに関する共通の経験を見つけ、相手に親近感を持つ。
- 他の人たちがどのように体調不良に対処しているか知り、今後の生活に活かす。

日本語パートナー

- 病気やけがに関する共通の経験を見つけ、相手に親近感を持つ。
- 学習者が体調不良にどのように対処しているか知り、外国で体調が悪くなった際の困難を知る。

準備するもの

- ワークシート、ふりかえりシート
- 練習シート（活動で使う場合）
- あれば、辞書
- あれば、Wi-Fi
- ひらがな・カタカナシート（使いたい人が使えるように）
  https://tsunagarujp.bunka.go.jp/nihongo#form1

役立つ資料

- 湿布、かゆみ止め、目薬、栄養ドリンクなど、ふだん使用している実際のもの（参加者自身に用意してもらう）

ふ る さ と

Can-do statements

① ふるさとがどこにあるか、日本語で伝えることができる。

② ふるさとのおすすめのものや場所などについて、日本語で話すことができる。

活動のねらい

日本語学習者

- 日本人・外国人に関わらず、様々な場所の出身の人が参加していることを知る。
- 自分のふるさとの場所や、様子について伝える日本語の表現を知る。
- 違う国の人に伝えるためにはどのように伝えると理解されやすいか気づく。

日本語パートナー

- 日本人・外国人に関わらず、様々な場所の出身の人が参加していることを知る。
- 違う国の人に伝えるためにはどのように伝えると理解されやすいか気づく。

準備するもの

- ワークシート、ふりかえりシート
- 練習シート（活動で使う場合）
- あれば、辞書
- あれば、Wi-Fi
- ひらがな・カタカナシート（使いたい人が使えるように）
  https://tsunagarujp.bunka.go.jp/nihongo#form1

役立つ資料

- 地図（世界地図、日本地図、岐阜県の地図、町の地図など）
- ふるさとの写真や、ふるさとで撮った自分の写真など（参加者自身に用意してもらう）

ごみの出し方

Can-do statements

① 自分が住んでいるところで、いつ、どこに、どうやってごみを出したらいいかわかる。

② ごみを見て、正しく分別することができる。

活動のねらい

日本語学習者

- どうしてごみの分別が大切か理解する。
- 自分が住んでいる地域のごみの出し方を確認し、適切に捨てられるようになる。粗大ごみなど普段捨てないごみの捨て方を知る。
- 地域の人と一緒に活動することを通して、日本人でも分別に迷ったり悩んだりすることがあると知る。
- ごみの出し方について相談できるようになる。

日本語パートナー

- 国、地域、時代によってごみの出し方が違うことに気づく。
- あいまいなまま行っていた、自身のごみの出し方を確認する。
- 分別方法を理解するとき、実際にラベルを見て判断するとき、ごみを出すとき、それぞれの段階に言葉の壁が存在することに気づく。

準備するもの

- ワークシート、ふりかえりシート
- 練習シート（活動で使う場合）
- あれば、辞書
- あれば、Wi-Fi
- ひらがな・カタカナシート（使いたい人が使えるように）
  https://tsunagarujp.bunka.go.jp/nihongo#form1
- 活動で使うごみと、ごみを入れる容れ物

役立つ資料

- 地図（町の地図）
- その市町村が出しているごみ収集日カレンダー、ごみ分別資料集など
- 「さんあ～る」ごみ分別・ごみ出し情報がわかるアプリ https://delight-system.co.jp/threeR_HP/index.html
  ※多言語対応有 ※岐阜県は7市町対応（2023年2月現在）

防災1

Can-do statements

① 自分が住んでいるところで、どんな災害が起きるか知っている。

② どんな災害のとき、どこに逃げたらいいか知っている。

活動のねらい

日本語学習者

- 避難所などの安全な場所や避難の方法を知り、自分で身を守れるようになる。
- 自分が暮らす地域で起こりうる災害の危険性を知る。

日本語パートナー

- 外国人住民が手に入れられる災害に関する知識や情報が自分とは異なることを知り、必要なときにサポートできるようになる。
- 避難所などの安全な場所や避難の方法を知り、自分で身を守れるようになる。
- 自分が暮らす地域で起こりうる災害の危険性を知る。

準備するもの

- ワークシート、ふりかえりシート
- 練習シート(活動で使う場合)
- あれば、辞書
- あれば、Wi-Fi
- ひらがな・カタカナシート(使いたい人が使えるように)
  https://tsunagarujp.bunka.go.jp/nihongo#form1
- その地域で起きた災害の様子がわかる視覚資料
- 地域のハザードマップ
- 名刺サイズの紙(防災カード作成用)
  ※記入部分以外は、予め印字しておくのがおすすめ

役立つ資料

- 「多言語防災ガイド」岐阜県国際交流センター https://www.gic.or.jp/foreigner/disasterguide/
- 「災害から身を守ろう」岐阜県警察 https://www.pref.gifu.lg.jp/site/police/5247.html
- 「多言語辞書データ」気象庁 https://www.data.jma.go.jp/developer/multilingual.html

防災2

Can-do statements

① 自分が住んでいるところで、どんな災害が起きるか知っている。

② 災害に備えて、準備したほうがいいものを知っている。

活動のねらい

日本語学習者

- 大災害発生後に起こりうる状況を知り、今からできる、自分に必要な備えを考える。
- 自分が暮らす地域で起こりうる災害の危険性を知る。

日本語パートナー

- 外国人住民の災害に関する知識が、日本で育った人と異なることを知る。
- 宗教による食事の違いや言葉の壁など、災害時に外国人が抱えやすい問題に気づく。
- 以上を踏まえ、サポートできるようになる。
- 自分が暮らす地域で起こりうる災害の危険性を知る。

準備するもの

- ワークシート、ふりかえりシート
- 練習シート（活動で使う場合）
- あれば、辞書
- あれば、Wi-Fi
- ひらがな・カタカナシート（使いたい人が使えるように）
  https://tsunagarujp.bunka.go.jp/nihongo#form1
- その地域で起きた災害の様子がわかる視覚資料
- 防災グッズ
- 非常持出し袋（一度に持ち出せる量の例として）

役立つ資料

- 「多言語防災ガイド」岐阜県国際交流センター https://www.gic.or.jp/foreigner/disasterguide/
- 「災害から身を守ろう」岐阜県警察 https://www.pref.gifu.lg.jp/site/police/5247.html
- 「多言語辞書データ」気象庁 https://www.data.jma.go.jp/developer/multilingual.html

地震

Can-do statements

① 自分が住んでいるところで、どのくらい大きい地震が起きる可能性があるか知っている。

② 地震が起きたとき、どうやって自分の体を守ればいいか知っている。

③ 地震が起きたあと、どこに避難したらいいか知っている。

活動のねらい

日本語学習者

- 自分が暮らす地域で起こりうる大地震の危険性を知る。
- 地震発生時の危険や、身の守り方を知る。
- 避難所などの安全な場所や避難の仕方を知り、自分で身を守れるようになる。

日本語パートナー

- 自分が暮らす地域で起こりうる大地震の危険性を知る。
- 地震発生時の危険や、身の守り方を知る。
- 外国人住民が手に入れられる災害に関する知識や情報が自分とは異なることを知り、必要なときにサポートできるようになる。

準備するもの

- ワークシート、ふりかえりシート
- 練習シート（活動で使う場合）
- あれば、辞書
- あれば、Wi-Fi
- ひらがな・カタカナシート（使いたい人が使えるように）
  https://tsunagarujp.bunka.go.jp/nihongo#form1
- その地域で起きた災害の様子がわかる視覚資料
- 地域のハザードマップ

役立つ資料

- 「多言語防災ガイド」岐阜県国際交流センター https://www.gic.or.jp/foreigner/disasterguide/
- 「災害から身を守ろう」岐阜県警察 https://www.pref.gifu.lg.jp/site/police/5247.html
- 「多言語辞書データ」気象庁 https://www.data.jma.go.jp/developer/multilingual.html
- 「岐阜県地震体験車」岐阜県防災課 https://www.pref.gifu.lg.jp/page/185232.html
- 「シェイクアウト訓練」日本シェイクアウト提唱会議 http://www.shakeout.jp/

119番

Can-do statements

① 救急車や消防車を呼ぶ番号を知っている。

② 救急車や消防車を呼ぶときに説明しなければならないことがわかる。

活動のねらい

日本語学習者

- 必要に応じて、救急車・消防車を呼べるようになる。
  - ・救急車・消防車を呼ぶための番号がわかる。
  - ・日本の救急車・消防車の制度がわかる。
    （費用／到着にかかる時間／多言語通報）
  - ・通報時に聞かれる項目や、その伝え方を知る。
    （日本語でも外国語でも可）
- 必要なときに、周りの人に助けを求められるようになる。

日本語パートナー

- 通報の流れや注意点、聞かれる項目を具体的に知る。
- 国によって救急車・消防車の制度が違うことや、外国人住民が日本で救急車・消防車を利用する難しさについて理解する。
- 多言語通報システムなど役立つ情報を知る。
- 困っている外国人を見たときにどんな手助けが必要か考えられるようになる。

準備するもの

- ワークシート、ふりかえりシート
- 練習シート（活動で使う場合）
- あれば、辞書
- あれば、Wi-Fi
- ひらがな・カタカナシート（使いたい人が使えるように）
  https://tsunagarujp.bunka.go.jp/nihongo#form1
- 通報体験の準備（例：消防に依頼して、実際に通報させてもらう／教室で再現してもらう）

役立つ資料

- 「マルチリンガル119」案内チラシ https://www.pref.gifu.lg.jp/page/27815.html
- 「訪日外国人のための救急車利用ガイド」消防庁 https://www.fdma.go.jp/publication/portal/post1.html

110番

Can-do statements

① どんなときにどうやって警察に通報したらいいかわかる。

活動のねらい

日本語学習者

- 必要なときに、警察を呼べるようになる。
  ・警察を呼ぶための番号がわかる。
  ・通報時に聞かれる項目や、その伝え方を知る。
  （日本語でも外国語でも可）
- 必要なときに、周りの人に助けを求められるようになる。

日本語パートナー

- 通報の流れや注意点、聞かれる項目を具体的に知る。
- それぞれの人が持つ警察に対するイメージが異なることを理解する。
- 外国人住民が緊急通報をする難しさについて理解する。
- 困っている外国人を見たときにどんな手助けが必要か考えられるようになる。

準備するもの

- ワークシート、ふりかえりシート
- 練習シート（活動で使う場合）
- あれば、辞書
- あれば、Wi-Fi
- ひらがな・カタカナシート（使いたい人が使えるように）
  https://tsunagarujp.bunka.go.jp/nihongo#form1
- 通報体験の準備（例：警察に依頼して、実際に通報させてもらう／教室で再現してもらう）

役立つ資料

コラム「役立つ資料の探し方」

教室活動を考える際に、「どこを見ればわかるだろう」「多言語の資料があったらいいのに」と思ったことはありませんか。役立つサイトの一例を紹介します。

〇岐阜県の日本語教育、外国人向けの情報について

「岐阜県の日本語教育」 岐阜県
https://www.pref.gifu.lg.jp/page/26439.html

「ぎふ日本語学習支援サイト」 岐阜県国際交流センター
https://www.gic.or.jp/nihongo/

「外国人のみなさんへ」 岐阜県国際交流センター
https://www.gic.or.jp/foreigner/

〇全国の日本語教育に関するコンテンツ共有システム

「日本語教育コンテンツ共有システム（NEWS）」 文化庁
https://www.clair.or.jp/j/multiculture/tool library/index.html

〇全国で作られた多文化共生のための資料検索ツール

「多文化共生ツールライブラリー」 自治体国際化協会
https://www.clair.or.jp/j/multiculture/tool library/index.html

〇日本の生活・就労に関する制度の概要がわかる資料

「生活・就労ガイドブック」 出入国在留管理庁
https://www.moj.go.jp/isa/guidebook all.html

〇帰国・外国人児童生徒教育のための情報検索サイト

「かすたねっと」 文部科学省
https://casta-net.mext.go.jp/

5

活動の進め方の例

5

活動の進め方の例

［ 対話型のテーマ ］

自己紹介 ／ 買いもの ／ 病気やけが ／ ふるさと

対話型のテーマは、テーマについて、お互い自分のことを伝え合う対話活動が中心です。グループのメンバーを変えながら、何度も自分のことを伝えたり、いろいろな人から話を聞いたりします。どのテーマも基本的な進め方は同じです。それぞれのテーマのねらいや活動の意味を踏まえたうえで、参加者や地域の特徴に合わせて、工夫しながら活動を設計してください。

事前準備

1. そのテーマの「Can-do statements」と「ねらい」を確認する。（➡参照p.15～p.19）
2. ワークシートの表紙にある「あなたはどうですか」と、ワークシートの「準備しましょう」の記入欄を確認する。
3. 1と2を踏まえて、「準備しましょう」「話しましょう」それぞれの最初に示す例の内容や、方法を準備する。（➡詳細はp.31）
4. 活動の時間配分、グループの組み合わせを考える。必要な資料を準備する。

0 教室の準備

活動しやすいように会場の机やいすのセッティングをします。学習者と日本語パートナーが2～4人で座って話せるように準備しましょう。様々な日本語レベル、様々な背景の人が参加するため、グループのメンバーの組み合わせが重要です。「安心して話せる環境づくり」を目指して工夫してください。（詳細はp.27のコラム参照）

指導者は自分のことを伝えるための素材（実物や写真、手書きの絵）や地図などを用意しておきます。

必要な場合は、日本語パートナーと活動前に簡単な打ち合わせをしましょう。

0.5 テーマの提示

その日のテーマを全員で確認します。

指：その日の表紙のイラストやワークシートのタイトルを示して「今日は、病気・けがです」のように簡潔に示します。

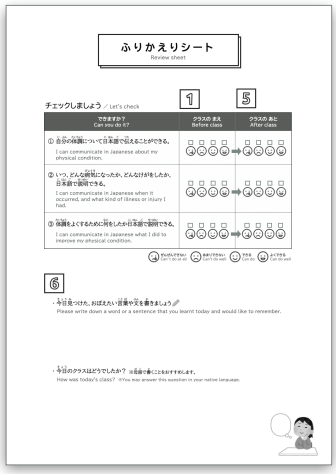
❶～❻は、ワークシートの番号と連動しています

1 ふりかえりシート「クラスのまえ」記入

学習者は、「できますか？」の項目であるCan-do statements（能力記述文）を母語または理解できる言語で読み、各項目について自己評価をします。

自己評価を通して、学習者はこれから教室で自分が何を学ぶべきか意識することができます。また、普段の生活で日本語を使う場面を思い起こすことで、生活の中で自分がどれぐらい日本語を使っているのか、どれぐらいできるのかをふりかえる習慣を作ることができます。

また、ここに書かれていることがその日の活動の目標になるので、学習者と日本語パートナーは、その日の活動の目標を最初に理解することができます。


ふりかえりシート
Review sheet

1 5

チェックしましょう / Let's check

できますか？ Can you do it?	クラスの まえ Before class	クラスの あと After class
① 自分の体調について日本語で伝えることができる。 I can communicate in Japanese about my physical condition.	☐ ☐ ☐ ☐ ④ ③ ② ①	☐ ☐ ☐ ☐ ④ ③ ② ①
② いつ、どんな病気になったか、どんなけがをしたか、日本語で説明できる。 I can communicate in Japanese when it occurred, and what kind of illness or injury I had.	☐ ☐ ☐ ☐ ④ ③ ② ①	☐ ☐ ☐ ☐ ④ ③ ② ①
③ 体調をよくするために何をしたか日本語で説明できる。 I can communicate in Japanese what I did to improve my physical condition.	☐ ☐ ☐ ☐ ④ ③ ② ①	☐ ☐ ☐ ☐ ④ ③ ② ①

④ ぜんぜんだめ Can't do at all　③ あまりできない Can't do well　② できる Can do　① よくできる Can do well

6

・今日見つけた、おぼえたい言葉や文を書きましょう。
Please write down a word or a sentence that you learnt today and would like to remember.

・今日のクラスはどうでしたか？ ※母語で書くことをおすすめします。
How was today's class? *You may answer this question in your native language.

指：活動に入る前に、ふりかえりシートの該当部分を指して、「ここ、チェックします」などの簡潔な日本語で、自己評価を記入するように指示をします。

パ：寄り添って作業を見守りましょう。

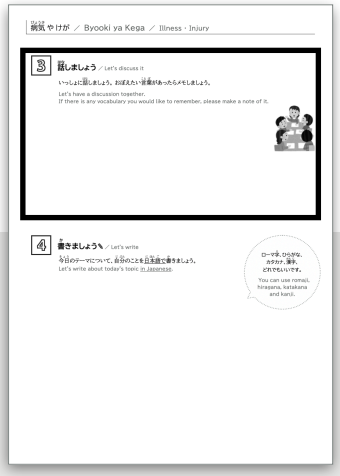
2 ワークシート「準備しましょう」

このテーマで自分が何を話したいか想像し、日本語で言えること、言えないことを整理します。空欄に母語や絵、わかるのであれば日本語でメモをします。この時点では、言いたいことが日本語で表現できる必要はありません。その後、書いたものを見せあいながら、日本語パートナーと言いたいことを日本語でどう表現するか確認していきます。ここで、できるだけ学習者の母語や媒介語（英語など）に頼らず、絵やジェスチャーなどを駆使してやりとりをすることが日本語を身につけることにつながります。

指 ： **このパートが活動のかなめです。**どのように活動を行うのかを学習者と日本語サポーターに理解してもらうために、ワークシートの②をホワイトボードに再現する形で自分の例を提示するといいでしょう。テーマ「病気やけが」の場合、自身が過去に負ったけがや病気の部位を指し、症状をジェスチャーや別途イラストなどで見せましょう。そして、例えば「指（yubi）」「切った（kitta）」と書きましょう。最初は文で提示するより単語のみのほうが理解しやすいかもしれません。

パ ： 指導者がやったことにならって、自分の伝えたいことをわかりやすく伝える準備をします。言葉だけではなくイラストや写真も活用します。学習者が活動の意図を十分に理解できず進め方がわからなくなっているときには、自分の例を紹介します。

3 ワークシート「話しましょう」



ペアやグループで、お互いにテーマに関して自分のことを話します。その中で出てきた、覚えておきたいと思ったことをワークシートにメモします。1回の話す時間は10～15分が目安です。※「自己紹介」のテーマのみ、立って相手を次々替えて話す活動があります。

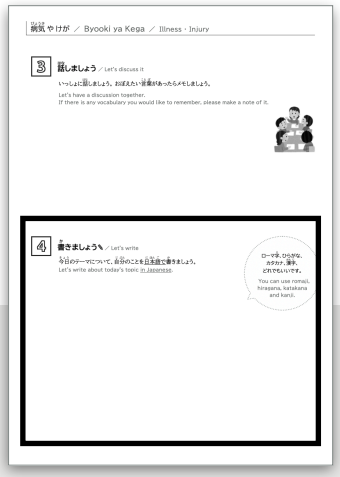
指 ： **話す準備から話せるようになるための段階**です。はじめに指導者が「準備しましょう」の前に示したことを、簡潔な日本語で短く話します。この日本語が日本語パートナーと学習者の話すモデルになります。そして、ペアで話すかグループで話すかを考えて、「じゃ、グループで話してください」などと言います。そして「パートナーから始めてください」と言います。

様子を見て、途中でグループのメンバーを入れ替えます。対話相手を替えて繰り返し話す中で、単語だけのやりとりから文になったり、学習の回が進む過程で文になったりしていきます。学習者が話すことに抵抗がなくなってきたら、全員が立って相手を次々と替える交流活動を行ってもいいでしょう。最後に発表の時間を設ける場合は「みんなに話します。誰か？」と促します。

パ ： 指導者がやったことにならって、まずは自分のことをやさしい日本語で伝えてみましょう。このパートナーの日本語が、学習者の話すモデルになります。

4 ワークシート「書きましょう」

交流活動が終わったら、自分のことを文で書いてみましょう。ローマ字、ひらがな、カタカナ、漢字のどれで書いてもかまいません。単語の羅列から文にすることを繰り返す中で、助詞や文末表現に気づくきっかけが生まれます。ひらがなやカタカナで書きたい人には、五十音表などを用意しておきましょう。



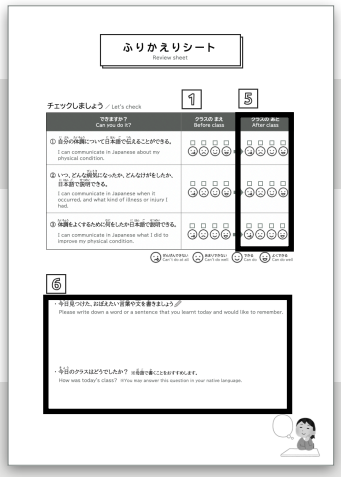
指：シートの該当部分を指して、「ここ、書きます。ローマ字OKです」などと簡潔に伝えます。

パ：話したことを文にする際も、日本語の文字を書く際もパートナーの支援が必要になります。学習者に寄り添って、どの文字を使うか五十音表を指さしたり、例を記したりして支援します。

5 6 ふりかえりシート記入

・クラスのあと

自己評価をもう一度します。



指：該当部分を指して「ここ、チェックします」などのやさしい日本語で伝えます。

・覚えたい言葉や文

ワークシートにメモしたことを見ながら、覚えたい言葉や文を記録し、語彙や表現を整理します。

指：シートの該当部分を指して、「ここ、書きます」と言ってから、ワークシートを指して「ここ、見ます」と言って、もう一度「ここ、書きます」のように伝えます。

・今日の感想

クラス前と後の自己評価に対して、どうしてそう思ったのか、学習する中で自分はどうだったかを記入します。自分の記録として記入するものなので、学習者自身がわかる言語で詳細に書くことが重要です。

指：シートの該当部分を指して、「ここ書きます。英語いいです。スペイン語いいです。何語でもいいです」のように伝えます。

パ：日本語パートナーも自身の活動をふりかえって記録しましょう。

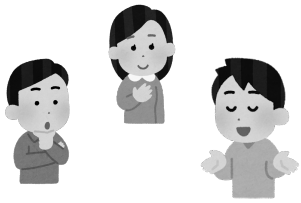
7 教室活動が終わったあと

日本語指導者と日本語パートナーで活動のふりかえりを行います。その日の活動、学習者の様子をふりかえり、気づいたことを話し合います。例えば、いいと思った誰かのやり方や、ある学習者が喜んでくれたことなどをシェアをしてもいいかもしれません。

コラム「 参加者の組み合わせの工夫 」

この教材を使った活動は、基本的にグループに分かれて進んでいきます。1グループ2～4人(学習者1～3 ： 日本語パートナー1～2)が理想です。教室が始まったら、参加者の様子をよく観察してみてください。一番重要なのは、みんなが楽しく、安心して参加できる場づくりです。それを実現するために、グループのメンバーの組み合わせを考えてみましょう。

組み合わせを考えるときのポイントは、①安心感を大切にするか、②相乗効果を期待するか、の二つです。1回の教室活動の中で①から②と変化させてもいいですし、第3回ぐらいになって慣れてきた頃に②を目指すのもいいと思います。



①安心感を生む組み合わせの例

- 性別や年齢、日本語のレベルが近い人同士で組み合わせる
- 友人・知り合いと一緒に組み合わせる
- 母語や日本語以外の共通言語がある人を組み合わせる
- 話を引き出したり、わかりやすく伝えたりするのが上手な人と組み合わせる
- 1対1で、その人のペースで話せるように組み合わせる

②相乗効果を生む組み合わせ

- 共通の話題がありそうな人と組み合わせる
- サポートしてくれる同国の人と離してみる
- 難しい日本語で話してしまう日本語パートナーと、かみ砕いてコミュニケーションすることが得意な日本語パートナーを組み合わせる

コラム「学習者の日本語能力のものさし」

初めて教室に参加する学習者がどれぐらい日本語ができるのか知りたいときはありませんか。

その人の日本語レベルがわかると、適切なサポートを提供しやすくなったり、次の目標を設定しやすくなります。そんなときに使えるツールを１つご紹介します。

「にほんごチェック！」文化庁
https://www.nihongo-check.bunka.go.jp/

日本語の「話す力」「聞く力」「やりとり」「読む力」「書く力」それぞれについて、複数のCan-do statementsに答えていくことで、その人の自己評価による日本語レベルがわかるツールです。数多くの言語に対応しており、それぞれスマホから答えることができます。

［ 行動・体験型のテーマ ］

ごみの出し方 ／ 防災1 ／ 防災2 ／ 地震 ／ 119番 ／ 110番

行動・体験型のテーマも、対話型の進め方をベースに作られており、最初と最後の活動は共通しています。しかし、テーマによって、最初と最後以外の進め方はそれぞれ違います。ここでは、全てのテーマの進め方の例を個別にご紹介します。（共通部分は「対話型」を参考にしてください）

防災1、防災2、地震のテーマは、ワークシートにある活動を時間内（90分～120分を想定）に全部行うのは難しいかもしれません。その地域で安心して暮らすために知っておくべき情報は何かを考え、取捨選択して活動を組み立ててください。

また、行動・体験型のテーマは、地域にいる専門家（消防や防災活動の団体など）と連携すると正しい情報が伝えられるだけでなく、リアリティのある活動がしやすくなります。連携する人や組織にも地域で暮らす外国人の存在を知ってもらえる絶好の機会です。自分の市町村に連携できそうな人がいないか探してみましょう。

ごみの出し方

事前準備

1. そのテーマの「Can-do statements」と「ねらい」を確認する。（➡参照p.15、p.20）
2. ワークシートの表紙にある「あなたはどうですか」と、ワークシートの指示文を全て確認し、このワークシートを使ってできる活動内容を確認する。地域の状況や参加者のニーズに合わせて実施する活動を選択する。
3. 活動の目標を達成するために、活用できる地域の資料を集め、活動を組み立てる。専門家と連携したり、教室の外に見学に行ったりする場合は、事前に進め方や資料の提示の仕方などの打ち合わせをする。

0 教室の準備

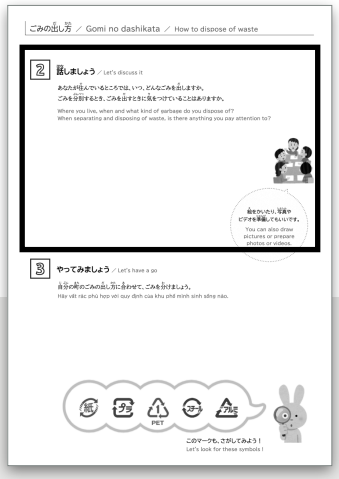
0.5 テーマの提示

1 ふりかえりシート「クラスのまえ」記入

p.29～p.30を見てね！

2 ワークシート「話しましょう」

ワークシートの指示文を指し、話してほしいことを問いかけます。「あなたが住んでいるところでは、いつ、どんなごみを出しますか。ごみを分別するとき、ごみを出すときに気を付けていることはありますか」※それぞれが持っている知識や経験を共有します。ここで十分に日本語で伝えられなくても問題ありません。



指：最初に指導者が自分のことをやさしい日本語で話し、例を示します。そして、ペアで話すか、グループで話すかを考えて、「じゃ、グループで話してください」などと言います。

パ：トピックについてグループの人といっしょに話して、知っていることや体験したことなどを共有します。テーマに関する背景知識を活性化することで、これ以降の活動に参加者が取り組みやすくすることが目的です。これ以降の活動のために日本語の語彙や表現の準備をすることが目的ではありません。そのため、必ずしも日本語のみで表現する必要はなく、絵や写真などを介して、相手の言いたいことを捉えたり、自分の伝えたいことを伝えたりするなど工夫をしてみましょう。

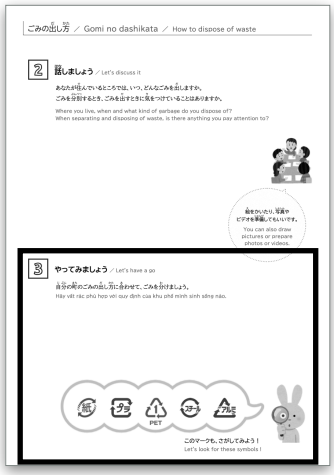
2.5 ごみを分別して出す理由を共有する【連携ポイント！】

ごみの分別状況は国によって様々です。分別をすることでリサイクルが可能になり、もう一度資源として活用できること、分別しなければそのままごみになってしまうことなど、分別の意義を写真・イラストなどを駆使して皆で共有しておきましょう。

再生資源を使って作られた物を実際に見ると、分別した資源の循環をさらに感じられるかもしれません。

指：専門家（市町村の職員や、ごみ処理施設の担当者など）を招き、「どうしてごみを分ける必要があるのか」などの話をしてもらってもいいかもしれません。専門家と連携する場合、必ず事前に打ち合わせを行いましょう。例えば、教室での指導者と専門家のそれぞれの役割や、専門家に担っていただきたい部分の確認をしましょう。説明を依頼するのであれば、使用する資料や説明するときの日本語が難しくなりすぎないように、協力して準備するといいでしょう。

3 ワークシート「やってみましょう」


ごみの出し方 ／ Gomi no dashikata ／ How to dispose of waste

2 話しましょう ／ Let's discuss it

みなさんが住んでいるところでは、いつ、どんなごみを出しますか。
ごみを分別するとき、ごみを出すときに気をつけていることはありますか。

Where you live, when and what kind of garbage do you dispose of?
When separating and disposing of waste, is there anything you pay attention to?

絵をかいたり、写真やビデオを準備してもいいです。
You can also draw pictures or prepare photos or videos.

3 やってみましょう ／ Let's have a go

自分の町のごみの出し方に合わせて、ごみを分けましょう。
Hãy viết các sản phẩm của khu phố mình sinh sống nào.

紙 プラ PET サー アルミ

このマークも、さがしてみよう！
Let's look for these symbols !

［段階1］ 分別の際に手掛かりになるのは「リサイクルマーク」です。代表的なものをワークシートに載せました。各グループに、マークが確認できるサンプルごみを配布します。ワークシートにあるマークを、実際のごみの中から探し、それぞれのマークの意味を確認しましょう。

［段階2］ その市町村の「ごみの出し方の資料」を配布し、マークを手掛かりに、その地域の方法で、ごみを分別して捨ててみましょう。ごみについている様々なマークを確認しながら、学習者とパートナーは実際に分ける活動をします。市町村に協力してもらい、実際にごみ収集時に使用しているゴミ箱などが用意できると、より実生活に即した活動ができるでしょう。ごみの分別方法は地域によって異なるので、指導者はこの活動の前に、地域のごみの分別について調べておきましょう。また、ごみの出し方はマイナーチェンジを繰り返しているため、日本人住民であっても曖昧な点や、「こうするべき」という考え方にずれがあることが想定されます。その場で市町村の明確な解答を得るためにも専門家（市町村の職員や、リサイクル施設の担当者など）の協力が欠かせません。

指：最初に、ごみのマークとごみ箱を全体確認しながら、いくつか例を見せましょう。

パ：分別に必要なリサイクルマークをいっしょに確認しつつ、学習者が自分で判断できるようにサポートしましょう。

4 ワークシート「わたしのごみの出し方」

自身の地域のごみの出し方を、表に書き込む（もしくは下の部分を切り取って貼る）活動です。市町村のごみの出し方に関する資料があれば、配布し、それを見ながら行いましょう。※このシートは曜日入りと曜日なしの2種類があります。地域のごみ出し日を考慮して使いやすい方を使ってください。

各市町村で「ごみの出し方の一覧表」が作成されていますが、翻訳されているものはかなり少ないうえ、たとえ自分がわかる言語で見ることができても、大量の情報の中から自分にあてはまる情報だけを探して理解するのは大変なことです。パートナーのサポートを受けながら、自分のためのごみの出し方シートを作り、毎日の生活で活用してもらうことを目指します。

指：最初に例を見せましょう。市町村によるごみの出し方に関する資料があれば、それとの照らし合わせ方も例示できると、活動の助けになるかもしれません。

パ：自身のシートも作成してみましょう。このパートナーの行動が、学習者の活動モデルになります。

4.5 質疑応答

活動に参加する中で、いろいろな疑問が湧いてきます。気になったことは専門家にすぐに聞きましょう。専門家から参加者に伝えたいことがあればこのタイミングで伝えるといいでしょう。

5 6 ふりかえりシート記入

7 クラスが終わったあと

p.32～p.33を見てね！

コラム「外部との連携①」

A市には役場の防災担当者、B町には警察署員が教室に外部講師として来てくれました。実は当初、日本語教師でも日本語パートナーでもない外部の人が日本語で専門的なことを話して、学習者が理解できるのかと少々懐疑的な思いがありました。しかし、結果的にそれは杞憂に終わり、この連携は非常によい効果を生みました。B町ではある学習者が「内容は少し難しかったがわかったことも多くあったし、何よりも自分達のためにこのような機会を作ってくれたことが嬉しくこの町が大好きになった」とふりかえりシートに書いていました。B町では警察署員の説明が非常にわかりやすかったこともあり、学習者のみならず日本語パートナーからも「知ることができてよかった」という声が多く上がりました。ただし、適宜指導者が声を掛ける、扱う項目を絞るなど留意は必要です。

防災1

事前準備

1. そのテーマの「Can-do statements」と「ねらい」を確認する。（➡参照p.15、p.21）
2. ワークシートの表紙にある「あなたはどうですか」と、ワークシートの指示文を全て確認し、このワークシートを使ってできる活動内容を確認する。地域の状況や参加者のニーズに合わせて実施する活動を選択する。
3. 活動の目標を達成するために、活用できる地域の資料を集め、活動を組み立てる。専門家と連携したり、教室の外に見学に行ったりする場合は、事前に進め方や資料の提示の仕方などの打ち合わせをする。

0 教室の準備

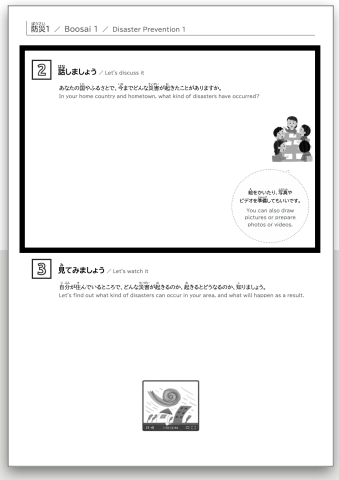
0.5 テーマの提示

1 ふりかえりシート「クラスのまえ」記入

p.29～p.30を見てね！

2 ワークシート「話しましょう」

ワークシートの指示文を指し、話してほしいことを問いかけます。「あなたの国やふるさとで、今までどんな災害が起きたことがありますか」※それぞれが持っている知識や経験を共有します。ここで十分に日本語で伝えられなくても問題ありません。

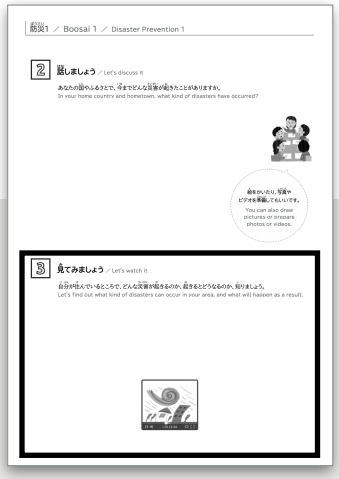


指：最初に指導者が自分のことをやさしい日本語で話し、例を示します。そして、ペアで話すか、グループで話すかを考えて、「じゃ、グループで話してください」などと言います。

パ：トピックについてグループの人といっしょに話して、知っていることや体験したことなどを共有します。テーマに関する背景知識を活性化することで、これ以降の活動に参加者が取り組みやすくすることが目的です。これ以降の活動のために日本語の語彙や表現の準備をすることが目的ではありません。そのため、必ずしも日本語のみで表現する必要はなく、絵や写真などを介して、相手の言いたいことを捉えたり、自分の伝えたいことを伝えたりするなど工夫をしてみましょう。

3 ワークシート「見てみましょう」【連携ポイント！】

災害を「身近な自分ごと」と捉えてもらうための段階です。日本でよく起こる災害や、地域特有の災害、地域で過去に実際に起きた災害について紹介しましょう。もし写真や映像などの資料があれば用意しましょう。



指：**このパートが活動のかなめです。**災害を「身近な自分ごと」として捉えてもらえないと、次の活動が意義のあるものになりません。専門家（市町村の職員や、防災士など）を招き、地域特有の災害について紹介してもらってもいいかもしれません。専門家と連携する場合、必ず事前に打ち合わせを行いましょう。例えば、教室での指導者と専門家のそれぞれの役割や、専門家に担っていただきたい部分の確認をしましょう。説明を依頼するのであれば、使用する資料や説明するときの日本語が難しくなりすぎないように、協力して準備するといいでしょう。

4 ワークシート「確認しましょう」【連携ポイント！】

防災1 ／ Boosai 1 ／ Disaster Prevention 1

4 確認しましょう ／ Let's check

1 自分が住んでいるところで、どんな災害が起きるかを知るために、いっしょにハザードマップを確認しましょう。
In order to find out what kind of disasters can occur in your local area, let's check the hazard map together.

2 自分の暮らしている「地区」の名前と避難する場所を確認しましょう。
Let's check the name of the "district" where you live and the evacuation point.

3 自分やいっしょに住んでいる家族はいつ避難すればいいのか、確認しましょう。
Let's check when you and the family you live with should evacuate.

レベル5		緊急 安全確保
レベル4		避難指示
レベル3		高齢者等避難
レベル2		大雨・洪水・高潮注意報（気象庁）
レベル1		早期注意情報（気象庁）

防災情報レベル（例）Ref.: https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/bousai/kinkyu.html#2021_1706

5 作りましょう ／ Let's make it

「防災カード」を作ってみましょう。
Let's make a "disaster preparedness and prevention card".

例No.1 / Example

困っています。
助けてください。

表面 / Front

例No.1 / Example

・名前 / Name
・わかる言語 / Languages you understand
・避難するところ / Evacuation point
・食べられないもの（アレルギー・宗教）Dietary requirements (e.g. allergies, religious requirements)
・緊急連絡先 / Emergency contact
・その他（例：持病）/ Other (e.g. health conditions)

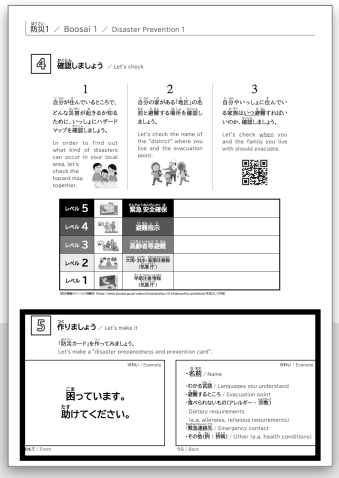
裏面 / Back

1. 住んでいるところによって災害の種類や危険度は異なります。ハザードマップでいっしょに確認しましょう。
2. 災害時には「地区」ごとに避難情報などが出されます。たくさん流れてくる情報の中から自分に関わる情報を見つけられるように、自分が住んでいるところの「地区名」を確認しましょう。
3. 避難するタイミングは、災害の種類や住んでいるところ、家族構成によって異なります。 自分のタイミングを確認しましょう。

指：この活動には防災や災害に関する専門的な知識が必要です。必ず事前に地域の防災情報について調べておきましょう。専門家に活動のフォローに入ってもらうのも1つの手です。専門的な知識を持っている方たちに、場所による災害の危険度の違いや、逃げるタイミングなどについて、より的確なアドバイスをもらうことができます。ただ、外国人とのコミュニケーションに慣れていない方が多いので、事前に必ず「学習者に伝わりやすい」日本語について打ち合わせを行いましょう。

パ：学習者といっしょに、1、2、3について確認しましょう。今回の目的は、関連する日本語を学ぶことではなく、自分の身の回りで起きそうな災害やその対処方法について知り、地域で少しでも安心安全に暮らせるようになることです。そのため、必ずしも日本語のみで表現する必要はなく、ジェスチャーや絵など使えるものは何でも使って、相手の言いたいことを捉えたり、自分の伝えたいことを伝えるなど工夫をしてみましょう。

5 ワークシート「作りましょう」


防災1 ／ Boosai 1 ／ Disaster Prevention 1

4 確認しましょう ／ Let's check

1 自分が住んでいるところで、どんな災害が起きるかを知るために、いっしょにハザードマップを確認しましょう。
In order to find out what kind of disasters can occur in your local area, let's check the hazard map together.

2 自分の暮らしている「地区」の名前と避難する場所を確認しましょう。
Let's check the name of the "district" where you live and the evacuation point.

3 自分やいっしょに住んでいる家族はいつ避難すればいいのか、確認しましょう。
Let's check when you and the family you live with should evacuate.

レベル5		緊急 安全確保
レベル4		避難指示
レベル3		高齢者等避難
レベル2		大雨・洪水・高潮注意報（気象庁）
レベル1		早期注意情報（気象庁）

防災情報レベル（例）Ref.: https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/bousai/kinkyu.html#2021_1706

5 作りましょう ／ Let's make it

「防災カード」を作ってみましょう。
Let's make a "disaster preparedness and prevention card".

例No.1 / Example

困っています。
助けてください。

表面 / Front

例No.1 / Example

・名前 / Name
・わかる言語 / Languages you understand
・避難するところ / Evacuation point
・食べられないもの（アレルギー・宗教）Dietary requirements (e.g. allergies, religious requirements)
・緊急連絡先 / Emergency contact
・その他（例：持病）/ Other (e.g. health conditions)

裏面 / Back

名刺サイズの「防災カード」を作る活動です。このカードに、災害時に必要になるであろう自分の情報を日本語でまとめます。どうやって日本語で伝えればいいかわからなくても、このカードを見せることで助けを得やすくなります。名刺サイズで作成すれば、財布などに入れておくことができます。

指：最初に指導者が自分のカードの例を示しましょう。

パ：学習者がカードを作るサポートをしましょう。学習者とやりとりをしながら、カードに書くべきことを拾い出しましょう。学習者がひらがなやカタカナを書くのが苦手な場合は、ひらがな・カタカナシートの、該当文字を指差すなどして、書くサポートをしましょう。

5.5 質疑応答

活動に参加する中で、いろいろな疑問が湧いてきます。気になったことは専門家にすぐに聞きましょう。専門家から参加者に伝えたいことがあればこのタイミングで伝えるといいでしょう。

6 7 ふりかえりシート記入

8 クラスが終わったあと

6 →p.32の 5
7 →p.32の 6
8 →p.33の 7
を見てね！

コ ラ ム「 外部との連携② 」

外部の専門家と連携する場合は、必ず事前にねらいや目的などを打ち合わせで共有しておきましょう。専門的な知識をいかに外国人にもわかりやすく伝えるかという点で、日本語指導者と専門家は協力が可能です。専門家に日本語教室に関わってもらうと、双方に様々なメリットが生まれます。

まずは、専門家が登場することで、教室活動にリアリティが生まれます。また、専門的な知識を外国人住民にわかりやすく伝える方法は、日本語教室のみならず、様々な講座で活かしていくことが可能です。さらに、地域にどんな外国人住民が暮らしているのか、専門家に直接知ってもらう機会にもなります。このように日本語教室を通じて、地域の様々な人や団体が繋がれるような仕組みや関係を作っていきましょう。

防災2

事前準備

1. そのテーマの「Can-do statements」と「ねらい」を確認する。（➡参照p.15、p.22）
2. ワークシートの表紙にある「あなたはどうですか」と、ワークシートの指示文を全て確認し、このワークシートを使ってできる活動内容を確認する。地域の状況や参加者のニーズに合わせて実施する活動を選択する。
3. 活動の目標を達成するために、活用できる地域の資料を集め、活動を組み立てる。専門家と連携したり、教室の外に見学に行ったりする場合は、事前に進め方や資料の提示の仕方などの打ち合わせをする。

0 教室の準備

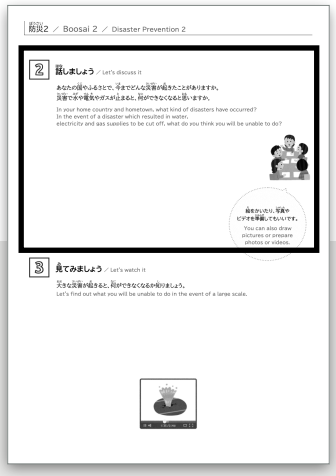
0.5 テーマの提示

1 ふりかえりシート「クラスのまえ」記入

p.29～p.30を見てね！

2 ワークシート「話しましょう」

ワークシートの指示文を指し、話してほしいことを問いかけます。
「あなたの国やふるさとで、今まで(中略)何ができなくなると思いますか」
※それぞれが持っている知識や経験を共有します。ここで十分に日本語で伝えられなくても問題ありません。


防災2 ／ Boosai 2 ／ Disaster Prevention 2

2 話しましょう ／ Let's discuss it

あなたの国やふるさとで、今までどんな災害が起きたことがありますか。
災害で水や電気やガスが止まると、何ができなくなると思いますか。

In your home country and hometown, what kind of disasters have occurred?
In the event of a disaster which resulted in water,
electricity and gas supplies to be cut off, what do you think you will be unable to do?

絵をかいたり、写真やビデオを用意してもいいです。
You can also draw pictures or prepare photos or videos.

3 見てみましょう ／ Let's watch it

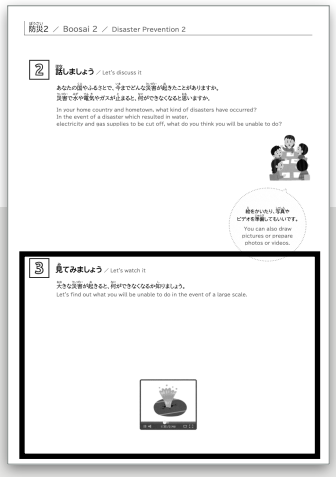
大きな災害が起きると、何ができなくなるか知りましょう。
Let's find out what you will be unable to do in the event of a large scale.

指：最初に指導者が自分のことをやさしい日本語で話し、例を示します。そして、ペアで話すか、グループで話すかを考えて、「じゃ、グループで話してください」などと言います。

パ：トピックについてグループの人といっしょに話して、知っていることや体験したことなどを共有します。テーマに関する背景知識を活性化することで、これ以降の活動に参加者が取り組みやすくすることが目的です。これ以降の活動のために日本語の語彙や表現の準備をすることが目的ではありません。そのため、必ずしも日本語のみで表現する必要はなく、絵や写真などを介して、相手の言いたいことを捉えたり、自分の伝えたいことを伝えたりするなど工夫をしてみましょう。

3 ワークシート「見てみましょう」【連携ポイント！】

災害を「身近な自分ごと」と捉えてもらうための段階です。その地域で起こり得る災害と、発災後にライフラインや物流が止まる可能性があることを紹介します。もし写真や映像などの資料があれば用意しましょう。


防災2 ／ Boosai 2 ／ Disaster Prevention 2

2 話しましょう ／ Let's discuss it

あなたの国やふるさとで、今までどんな災害が起きたことがありますか。
災害で水や電気やガスが止まると、何ができなくなると思いますか。

In your home country and hometown, what kind of disasters have occurred?
In the event of a disaster which resulted in water,
electricity and gas supplies to be cut off, what do you think you will be unable to do?

絵をかいたり、写真やビデオを用意してもいいです。
You can also draw pictures or prepare photos or videos.

3 見てみましょう ／ Let's watch it

大きな災害が起きると、何ができなくなるか知りましょう。
Let's find out what you will be unable to do in the event of a large scale.

指：**このパートが活動のかなめです**。災害を「身近な自分ごと」として捉えてもらえないと、次の活動が意義のあるものになりません。専門家(市町村の職員や、防災士など)を招き、地域特有の災害について紹介してもらってもいいかもしれません。専門家と連携する場合、必ず事前に打ち合わせを行いましょう。例えば、教室での指導者と専門家のそれぞれの役割や、専門家に担っていただきたい部分の確認をしましょう。説明を依頼するのであれば、使用する資料や説明するときの日本語が難しくなりすぎないように、協力して準備するといいでしょう。

4 ワークシート「災害時に役立つものを考えてみましょう」【連携ポイント！】

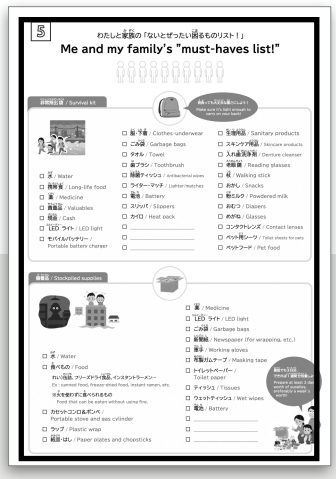
災害時に水や電気、ガスが止まったときのために、備えてあるといい物について考える活動です。非常食や水などの備えの他に、食品用ラップフィルムやアルミホイルなど身近な物が工夫次第で様々な用途に使えます。正解はありません。いっしょにいろいろなアイディアを考えてみましょう。

指 ： できるだけ実物を用意して、実際に触ったり使ってみたりできるようにしましょう。何をどうやって役立てられるかグループでいっしょに考えます。この部分は、専門家に来ていただき、サポートしてもらってもいいかもしれません。ただ、外国人とのコミュニケーションに慣れていない方が多いので、事前に必ず「学習者に伝わりやすい」日本語について打ち合わせを行いましょう。

パ：学習者といっしょに、様々な防災グッズが、どんなときに役立つのかいっしょに想像し、考えてみましょう。

5 ワークシート「わたしと家族の『ないとぜったい困るものリスト！』」【連携ポイント！】

自分には何が必要なのかを考える活動です。非常時に持ち出すものや、家に備蓄しておくものは、1人1人異なります。非常持出袋の場合、背負える重さであることも重要です。リュックの大きさや重さの例となるような実物を用意しておくと、中に入れる物を考える際のヒントになります。



指 ： もし準備できるのであれば、指導者自身が考えた非常持出袋を準備しておくといいかもしれません。また、教室内で作成したリストを元に、家でもう一度よく考えてリストを見直してみるよう声をかけましょう。専門家に活動に加わってもらうと、それぞれの人に合わせた的確なアドバイスをもらうことができます。

パ：自分のリストを作りながら、学習者のリスト作成をサポートしましょう。

5.5 質疑応答

活動に参加する中で、いろいろな疑問が湧いてきます。気になったことは専門家にすぐに聞きましょう。専門家から参加者に伝えたいことがあればこのタイミングで伝えるといいでしょう。

6 7 ふりかえりシート記入

8 クラスが終わったあと

6 →p.32の 5
7 →p.32の 6
8 →p.33の 7
を見てね！

コラム「学習者が少ないとき①」

D町の教室は、学習者の数に対して日本語パートナーが多いことが常態化していたのですが、あるとき、学習者3人に対して、日本語パートナーが15人という非常に人数のバランスの悪い回がありました。

学習者1人に対して日本語パートナー4，5人というグループを作ることも考えたのですが、日本語パートナーのほうが多いと、日本語パートナー同士でおしゃべりがはずみ、学習者がおいてけぼりになってしまうことがあります。そこで、その回は1人の学習者と2、3人の日本語パートナーのグループを作った上で、あえて日本語パートナーだけのグループを作りました。

日本語パートナーだけのグループにはコーディネーターがメンバーとしていっしょに座り、テーマについて一緒に話したり、やさしい日本語で言い換えるなどの活動を行いました。

「学習者とのおしゃべりが楽しい」とおっしゃる日本語パートナーが多い教室だったので、このような形態では不満が出るのではないかと心配していましたが、ふりかえりのときにはこのグループでよかったという声もあり、ほっとしました。

日本語パートナーが多く参加してくれる状況は大変ありがたいことですが、対話型の教室ではバランスも大切です。どうしてもバランスが悪い場合に備え、日本語パートナー同士が楽しい対話を通して学べるようなアクティビティを用意しておくのもよいと思います。

地震

事前準備

1. そのテーマの「Can-do statements」と「ねらい」を確認する。（➡参照p.15、p.23）
2. ワークシートの表紙にある「あなたはどうですか」と、ワークシートの指示文を全て確認し、このワークシートを使ってできる活動内容を確認する。地域の状況や参加者のニーズに合わせて実施する活動を選択する。
3. 活動の目標を達成するために、活用できる地域の資料を集め、活動を組み立てる。専門家と連携したり、教室の外に見学に行ったりする場合は、事前に進め方や資料の提示の仕方などの打ち合わせをする。

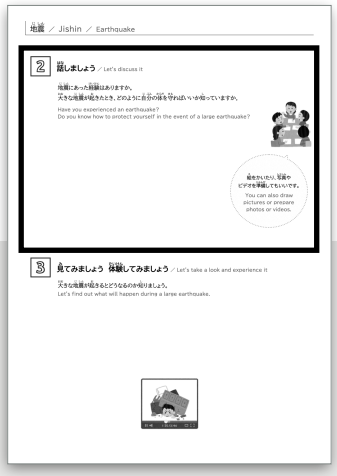
0 教室の準備

0.5 テーマの提示

1 ふりかえりシート「クラスのまえ」記入

p.29～p.30を見てね！

2 ワークシート「話しましょう」


地震 ／ Jishin ／ Earthquake

2 話しましょう ／ Let's discuss it

地震にあった経験はありますか。
大きな地震が起きたとき、どのように自分の体を守ればいいか知っていますか。
Have you experienced an earthquake?
Do you know how to protect yourself in the event of a large earthquake?

絵をかいたり、写真やビデオを準備してもいいです。
You can also draw pictures or prepare photos or videos.

3 見てみましょう 体験してみましょう ／ Let's take a look and experience it

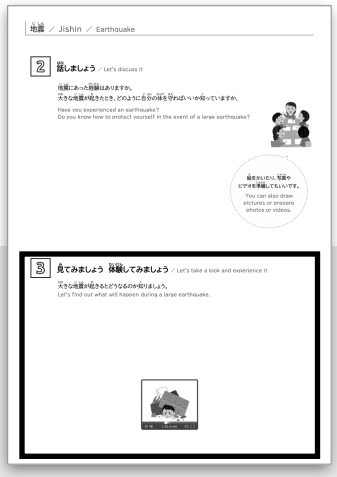
大きな地震が起きるとどうなるのか知りましょう。
Let's find out what will happen during a large earthquake.

ワークシートの指示文を指し、話してほしいことを問いかけます。
「地震にあった経験は（中略）自分の体を守ればいいか知っていますか」
※それぞれが持っている知識や経験を共有します。ここで十分に日本語で伝えられなくても問題ありません。

指：最初に指導者が自分のことをやさしい日本語で話し、例を示します。そして、ペアで話すか、グループで話すかを考えて、「じゃ、グループで話してください」などと言います。

パ：トピックについてグループの人といっしょに話して、知っていることや体験したことなどを共有します。テーマに関する背景知識を活性化することで、これ以降の活動に参加者が取り組みやすくすることが目的です。これ以降の活動のために日本語の語彙や表現の準備をすることが目的ではありません。そのため、必ずしも日本語のみで表現する必要はなく、絵や写真などを介して、相手の言いたいことを捉えたり、自分の伝えたいことを伝えたりするなど工夫をしてみましょう。

3 ワークシート「見てみましょう」【連携ポイント！】


地震 ／ Jishin ／ Earthquake

2 話しましょう ／ Let's discuss it

地震にあった経験はありますか。
大きな地震が起きたとき、どのように自分の体を守ればいいか知っていますか。
Have you experienced an earthquake?
Do you know how to protect yourself in the event of a large earthquake?

絵をかいたり、写真やビデオを準備してもいいです。
You can also draw pictures or prepare photos or videos.

3 見てみましょう 体験してみましょう ／ Let's take a look and experience it

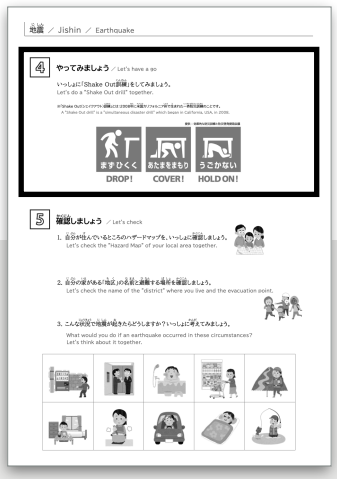
大きな地震が起きるとどうなるのか知りましょう。
Let's find out what will happen during a large earthquake.

地震を「身近な自分ごと」と捉えてもらうための段階です。過去に日本や住んでいる地域で起きた地震、住んでいる地域で今後起きる可能性のある地震について紹介しましょう。もし写真や映像などの資料があれば用意しましょう。

指：**このパートが活動のかなめです**。地震を「身近な自分ごと」として捉えてもらえないと、次の活動が意義のあるものになりません。専門家（市町村の職員や、防災士など）を招き、地域で起きた地震や、これから起こりうる地震について紹介してもらってもいいかもしれません。専門家と連携する場合、必ず事前に打ち合わせを行いましょう。例えば、教室での指導者と専門家のそれぞれの役割や、専門家に担っていただきたい部分の確認をしましょう。説明を依頼するのであれば、使用する資料や説明するときの日本語が難しくなりすぎないように、協力して準備するといいでしょう。

4 ワークシート「やってみましょう」【連携ポイント！】

教室の参加者全員で訓練を行います。地震発生時に自分の身をどうやって守ればいいか知ることが目的です。教室の場所や、使用している机や椅子などによっても、とるべき行動は変わってきます。事前に専門家に確認しておくといいでしょう。

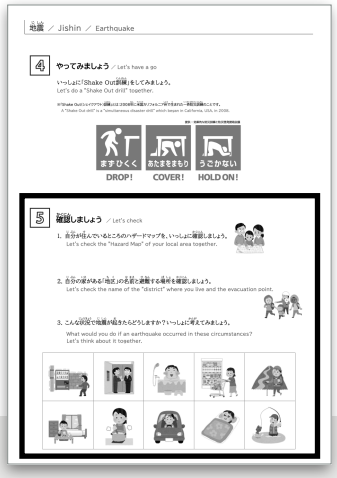


指：この活動は地震に関する専門的な知識が必要です。教材では「Shake Out訓練」という名称の一斉防災訓練を紹介しています。「Shake Out訓練」もしくは「シェイクアウト訓練」と検索すると、くわしく知ることができます。必ず事前に確認をしておきましょう。専門家に活動のフォローに入ってもらうのも1つの手です。専門的な知識を持っている方たちに、地震発生時の安全行動などについて、より的確なアドバイスをもらうことができます。ただ、外国人とのコミュニケーションに慣れていない方が多いので、事前に必ず「学習者に伝わりやすい」日本語について打ち合わせを行いましょう。

パ：学習者といっしょに、訓練に参加しましょう。

5 ワークシート「確認しましょう」【連携ポイント！】

1. 住んでいるところによって災害の種類や危険度は異なります。ハザードマップでいっしょに確認しましょう。
2. 災害時には「地区」ごとに避難情報などが出されます。たくさん流れてくる情報の中から自分に関わる情報を見つけられるように、自分が住んでいるところの「地区名」を確認しましょう。
3. 地震はいつどこで起きるかわかりません。様々な状況で地震が発生した場合の対処法について、いっしょに考えましょう。



指：この活動も④の活動と同様に、地震に関する専門的な知識が必要です。必ず事前に地震や地域の防災情報について調べておきましょう。④の活動同様に、専門家に活動のフォローに入ってもらうのも1つの手です。専門的な知識を持っている方たちに、場所による災害の危険度の違いや、様々な状況下での安全行動について、より的確なアドバイスをもらうことができます。ただ、外国人とのコミュニケーションに慣れていない方が多いので、事前に必ず「学習者に伝わりやすい」日本語について打ち合わせを行いましょう。

パ：学習者といっしょに、1、2、3について確認しましょう。今回の目的は、関連する日本語を学ぶことではなく、自身の身の回りで起きそうな災害やその対処方法について知り、地域で少しでも安心安全に暮らせるようになることです。そのため、必ずしも日本語のみで表現する必要はなく、ジェスチャーや絵など使えるものは何でも使って、相手の言いたいことを捉えたり、自分の伝えたいことを伝えるなど工夫をしてみましょう。

5.5 質疑応答

活動に参加する中で、いろいろな疑問が湧いてきます。気になったことは専門家にすぐに聞きましょう。専門家から参加者に伝えたいことがあればこのタイミングで伝えるといいでしょう。

6 7 ふりかえりシート記入

8 クラスが終わったあと

6 →p.32の 5
7 →p.32の 6
8 →p.33の 7
を見てね！

コラム「 学習者が少ないとき② 」

C市での事例です。突然の雨で、車利用が多い日本語パートナーはいつも通りの人数でしたが、自転車利用が多い学習者は1人しか来なかった日がありました。そこで、指導者とコーディネーターが学習者役になり、日本語パートナーが「やさしい日本語」で話す練習をしました。日本語パートナーは、自分がいつどんな病気をしてどうだったかを話し、学習者役の我々にもそれを尋ね、やりとりをしました。リアリティがないからちょっと･･･という反応が来るのでは、と心配しましたが、意外にも「かえって緊張しなかった、通じるかどうかがわかったしアドバイスももらえてよかった」という反応が多く、好評でした。また、これにより日本語パートナーと我々の距離も縮まり、その後も日本語パートナーからの質問などが多くなったように思いました。

119番

事前準備

1. そのテーマの「Can-do statements」と「ねらい」を確認する。（➡参照p.15、p.24）
2. ワークシートの表紙にある「あなたはどうですか」と、ワークシートの指示文を全て確認し、このワークシートを使ってできる活動内容を確認する。地域の状況や参加者のニーズに合わせて実施する活動を選択する。
3. 活動の目標を達成するために、活用できる地域の資料を集め、活動を組み立てる。専門家と連携したり、教室の外に見学に行ったりする場合は、事前に進め方や資料の提示の仕方などの打ち合わせをする。

0 教室の準備

0.5 テーマの提示

1 ふりかえりシート「クラスのまえ」記入

p.29～p.30を見てね！

2 ワークシート「話しましょう」

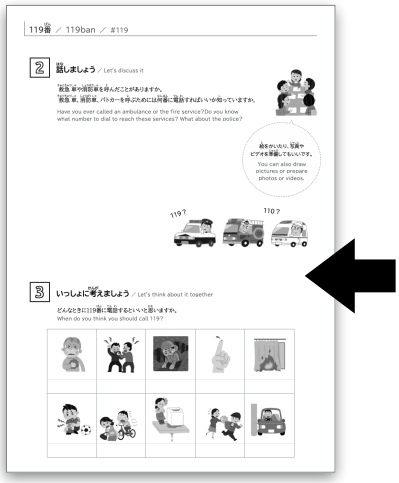
ワークシートの指示文を指し、話してほしいことを問いかけます。「救急車や消防車を呼んだことがありますか。救急車、消防車、パトカーを呼ぶためには何番に電話すればいいか知っていますか」
※それぞれが持っている知識や経験を共有します。ここで十分に日本語で伝えられなくても問題ありません。

指：最初に、指導者が救急車や消防車にまつわる経験についてやさしい日本語で話します。もし経験がなければ身近な人の話でも大丈夫です。そして、ペアで話すか、グループで話すかを考えて、「じゃ、グループで話してください」などと言います。

パ：指導者がやったことにならって、もし救急車や消防車を呼んだ経験があればやさしい日本語で伝えてみましょう。身近な人の話でも大丈夫です。また学習者の国の事情や学習者自身の経験にもよく耳を傾けてみましょう。トピックについてグループの人といっしょに話して、知っていることや体験したことなどを共有します。テーマに関する背景知識を活性化することで、これ以降の活動に参加者が取り組みやすくすることが目的です。これ以降の活動のために日本語の語彙や表現の準備をすることが目的ではありません。そのため、必ずしも日本語のみで表現する必要はなく、絵や写真などを介して、相手の言いたいことを捉えたり、自分の伝えたいことを伝えたりするなど工夫をしてみましょう。

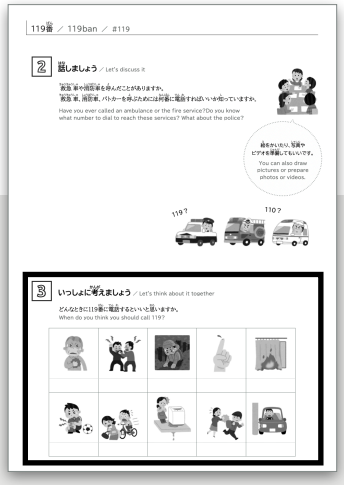
2.5 119番と110番について確認

救急車、消防車を呼ぶときは119番、警察を呼ぶときは110番に電話することを全体で確認します。救急車、消防車を呼んだ経験がある人に、簡単に経験を話してもらいましょう。「話しましょう」で、それぞれのグループで救急車と消防車を呼ぶ番号や、救急車と消防車を呼んだことがある人の話などを共有していると思いますが、次の活動に移る前に、教室全体で情報や経験、感想などを共有するといいでしょう。



3 ワークシート「いっしょに考えましょう」【連携ポイント！】

ワークシートのイラストを見て、どんな場合に119番に電話すべきかグループで考えるように指示します。110番、119番の使い分け、救急車の適正利用について知ってもらう活動です。



指 ： 消防署の方など、専門家に来ていただき、グループで話した後の答え合わせ役になってもらったり、日本の救急の基本的な流れを説明してもらってもいいかもしれません。専門家と連携する場合、必ず事前に打ち合わせを行いましょう。例えば、教室での指導者と専門家のそれぞれの役割や、専門家に担っていただきたい部分の確認をしましょう。説明を依頼するのであれば、使用する資料や説明するときの日本語が難しくなりすぎないように、協力して準備するといいでしょう。

パ ： 学習者といっしょに、どんなときに119番に電話するといいのか話し合いながら考えてみましょう。正しい答えにたどり着くことだけが目的ではなく、生まれ育った国の制度や社会状況によって、どんなときにどこに緊急通報をすればよいのかの判断に違いがあることをお互いに知ることもねらいとしています。

4 ワークシート「知っていると便利なこと」【連携ポイント！】

a）岐阜県が導入している「マルチリンガル119」の紹介と使い方を紹介します。

b）通報の際は、ひとりだけで対応せず、周りの人に協力を求めることも大切です。そのときの声のかけ方を確認します。

指 ：a）岐阜県の「マルチリンガル119」のチラシを準備するなどして、外国語でも通報ができることを簡単に紹介しましょう。消防署に依頼すると、マルチリンガル119の体験をさせてもらうことができます。

b）それぞれの表現がどのような場面で役立つのか、指導者とパートナーとで、再現して見せるといいでしょう。

5 ワークシート「やってみましょう」【連携ポイント！】

①通報の流れを知り、通報時に伝えなければいけない内容を知ります。
②自分に起こりそうな状況を考えて、通報体験に参加します。（日本語でも外国語でも可）

①通報の流れを知り、通報時に伝えなければいけない内容を知ります。
②自分に起こりそうな状況を考えて、通報体験に参加します。（日本語でも外国語でも可）

消防に依頼すると、通報体験をさせてもらうことができます。パートナーとのロールプレイで終わらせず、実際に消防署につないで通報体験をしたり、教室で消防の司令室の人との通報練習ができると、よりリアルなやりとりができます。また、この活動で消防の人に外国人とのコミュニケーションを体験してもらうことができるのも大きなメリットです。

指：最初に例を見せて、これからすることのイメージを共有しましょう。ロールプレイで自分なりの状況を考える際に、なかなかアイディアが浮かばない人もいるかもしれません。参加者が遭遇しそうな状況をいくつか提示するとスムーズにいくでしょう。

パ：学習者の通報体験・ロールプレイ前の準備、練習をサポートしましょう。緊急通報はパートナーにとっても非日常の出来事なので、余裕があればパートナーも通報者の立場で通報体験・ロールプレイに参加してみましょう。

5.5 質疑応答

活動に参加する中で、いろいろな疑問が湧いてきます。通報場所の住所がわからないときの対処法など、気になったことは専門家にすぐに聞きましょう。専門家から参加者に伝えたいことがあればこのタイミングで伝えるといいでしょう。

6 7 ふりかえりシート記入

8 クラスが終わったあと

6 →p.32の 5
7 →p.32の 6
8 →p.33の 7
を見てね！

110番

事前準備

1. そのテーマの「Can-do statements」と「ねらい」を確認する。（➡参照p.15、p.25）
2. ワークシートの表紙にある「あなたはどうですか」と、ワークシートの指示文を全て確認し、このワークシートを使ってできる活動内容を確認する。地域の状況や参加者のニーズに合わせて実施する活動を選択する。
3. 活動の目標を達成するために、活用できる地域の資料を集め、活動を組み立てる。専門家と連携したり、教室の外に見学に行ったりする場合は、事前に進め方や資料の提示の仕方などの打ち合わせをする。

0 教室の準備

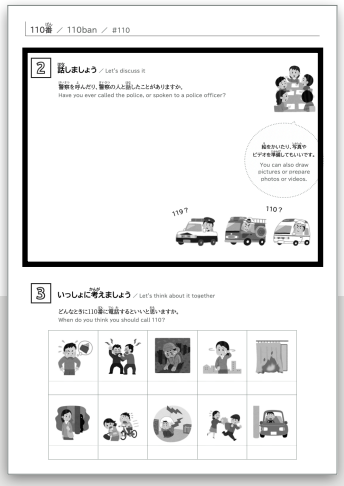
0.5 テーマの提示

1 ふりかえりシート「クラスのまえ」記入

p.29～p.30を見てね！

2 ワークシート「話しましょう」

ワークシートの指示文を指し、話してほしいことを問いかけます。「パトカーを呼んだことがありますか。救急車、消防車、パトカーを呼ぶためには何番に電話すればいいか知っていますか」
※それぞれが持っている知識や経験を共有します。ここで十分に日本語で伝えられなくても問題ありません。

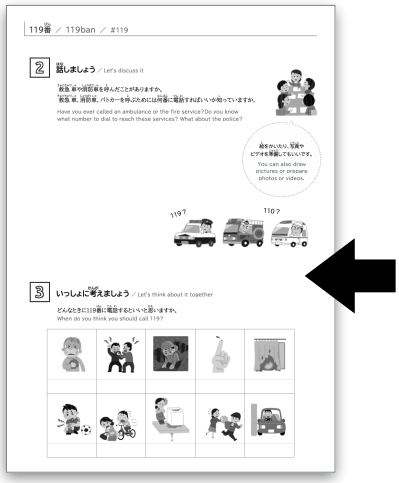


指：最初に、指導者がパトカーを呼んだ経験についてやさしい日本語で話します。もし経験がなければ身近な人の話でも大丈夫です。そして、ペアで話すか、グループで話すかを考えて、「じゃ、グループで話してください」などと言います。

パ：指導者がやったことにならって、もしパトカーを呼んだ経験があればやさしい日本語で伝えてみましょう。身近な人の話でも大丈夫です。また学習者の国の事情や学習者自身の経験にもよく耳を傾けてみましょう。トピックについてグループの人といっしょに話して、知っていることや体験したことなどを共有します。テーマに関する背景知識を活性化することで、これ以降の活動に参加者が取り組みやすくすることが目的です。これ以降の活動のために日本語の語彙や表現の準備をすることが目的ではありません。そのため、必ずしも日本語のみで表現する必要はなく、絵や写真などを介して、相手の言いたいことを捉えたり、自分の伝えたいことを伝えたりするなど工夫をしてみましょう。

2.5 110番と119番について確認

警察を呼ぶときは110番、救急車、消防車を呼ぶときは119番に電話することを全体で確認します。110番通報の経験がある人に、簡単に話してもらいましょう。「話しましょう」で、それぞれのグループでパトカーを呼ぶ番号や、110番を呼んだことがある人の話などを共有していると思いますが、次の活動に移る前に、教室全体で情報や経験、感想などを共有するといいでしょう。



3 ワークシート「いっしょに考えましょう」【連携ポイント！】

ワークシートのイラストを見て、どんな場合に110番に電話すべきかグループで考えるように指示します。110番、119番の使い分け、110番通報の適正利用について知ってもらう活動です。

指 ： 警察の方など専門家に来ていただき、グループで話した後の答え合わせ役になってもらったり、警察への通報の基本的な流れを説明してもらってもいいかもしれません。専門家と連携する場合、必ず事前に打ち合わせを行いましょう。例えば、教室での指導者と専門家のそれぞれの役割や、専門家に担っていただきたい部分の確認をしましょう。説明を依頼するのであれば、使用する資料や説明するときの日本語が難しくなりすぎないように、協力して準備するといいでしょう。

パ ： 学習者といっしょに、どんなときに110番に電話するといいのか話し合いながら考えてみましょう。正しい答えにたどり着くことだけが目的ではなく、生まれ育った国の制度や社会状況によって、どんなときにどこに緊急通報をすればよいのかの判断に違いがあることをお互いに知ることもねらいとしています。

4 ワークシート「知っていると便利なこと」【連携ポイント！】

a） 岐阜県警察が普及と啓発に取り組んでいる多言語三者通話と、その使い方を紹介します。

b）通報の際は、ひとりだけで対応せず、周りの人に協力を求めることも大切です。そのときの声のかけ方を確認します。

指 ：a）外国語でも通報ができることを簡単に紹介しましょう。岐阜県警察に依頼すると、三者通話での110番通報の体験をさせてもらうことができます。

b）それぞれの表現がどのような場面で役立つのか、指導者とパートナーとで、再現して見せるといいでしょう。

5 ワークシート「やってみましょう」【連携ポイント！】

①通報の流れを知り、通報時に伝えなければいけない内容を知ります。
②自分に起こりそうな状況を考えて、通報体験に参加します。（日本語でも外国語でも可）

警察に依頼すると、通報体験をさせてもらうことができます。パートナーとのロールプレイで終わらせず、実際に警察につないで通報体験をしたり、教室で警察本部の通信指令課の人との通報練習ができると、よりリアルなやりとりができます。また、この活動で警察の人に外国人とのコミュニケーションを体験してもらうことができるのも大きなメリットです。

指：最初に例を見せて、これからすることのイメージを共有しましょう。ロールプレイで自分なりの状況を考える際に、なかなかアイディアが浮かばない人もいるかもしれません。参加者が遭遇しそうな状況をいくつか提示するとスムーズにいくでしょう。

パ：学習者の通報体験・ロールプレイ前の準備、練習をサポートしましょう。緊急通報はパートナーにとっても非日常の出来事なので、余裕があればパートナーも通報者の立場で通報体験・ロールプレイに参加してみましょう。

5.5 質疑応答

活動に参加する中で、いろいろな疑問が湧いてきます。通報場所の住所がわからないときの対処法など、気になったことは専門家にすぐに聞きましょう。専門家から参加者に伝えたいことがあればこのタイミングで伝えるといいでしょう。

6 7 ふりかえりシート記入

8 クラスが終わったあと

6 →p.32の 5
7 →p.32の 6
8 →p.33の 7
を見てね！

コラム「大切なのは『やり方』ではなく『なぜやるか』」

この冊子は、地域の日本語教育に関わる様々な人が手にとってくださることを想定し、作成しました。そのため、できるだけ教室進行をイメージしやすいよう、活動の進め方の例を細かく提示してあります。

しかし、ここに書かれているやり方は例の一つにすぎません。書かれているやり方通りにただ教室活動を行っても、なんとなく教室活動を行い、その結果、教室開催がそのとき限りのものになってしまう可能性もあります。そうならないためにも、教室に関わる全ての方が「何のために、何を目指してやるか」という共通の認識を持つことが、大切です。

岐阜県は広く、各地域ごとに特徴があるため、そこに住む人も、地域の状況も、様々です。まずは、地域の実情や課題を把握することから始めてみるといいかもしれません。それから、「どんな町にしたいか」「そのまちづくりのためにどんな日本語教室があったらいいか」、地域で暮らしている人たちや教室の関係者といっしょに考えてみてはどうでしょう。ぜひ、そのうえで、この冊子を参考にしてください。

みなさんのまちづくり、日本語教室づくりにとって、この冊子が少しでも役立つことを願っています。

検討過程

令和２年度	教育カリキュラム・教材テキスト作成に関する意見交換会（全４回）
令和３年度	岐阜県日本語教育のカリキュラム等検討委員会（全２回）
	市町村と連携したモデル日本語教室（４教室、全23回） 大垣市 ／ 各務原市 ／ 坂祝町 ／ 中津川市
令和４年度	地域日本語教育コーディネーター会議
	市町村と連携したモデル日本語教室（６教室、全34回） 岐南町 ／ 下呂市 ／ 垂井町 ／ 土岐市 ／ 瑞浪市 ／ 輪之内町

岐阜県　地域日本語教育のための教材「ぎふ せいかつのにほんご」

進め方のアイディア

初版　令和５年３月１日

執　筆　令和４年度　岐阜県地域日本語教育コーディネーター
新井 克之 ／ 安藤 郁美* ／ 鍋島 史歩
林　エミ ／ 藤田 裕一郎 ／ 藤原 弥央*　＊執筆統括

協　力　岐阜県日本語教育総括コーディネーター
横山 博信

発　行　岐阜県 清流の国推進部 外国人活躍・共生社会推進課

問合せ　岐阜県 清流の国推進部 外国人活躍・共生社会推進課　多文化共生係
〒500－8570　岐阜県岐阜市薮田南2－1－1
電　話：058－272－1483（ダイヤルイン）
メール：c11176@pref.gifu.lg.jp

「令和４年度地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」活用